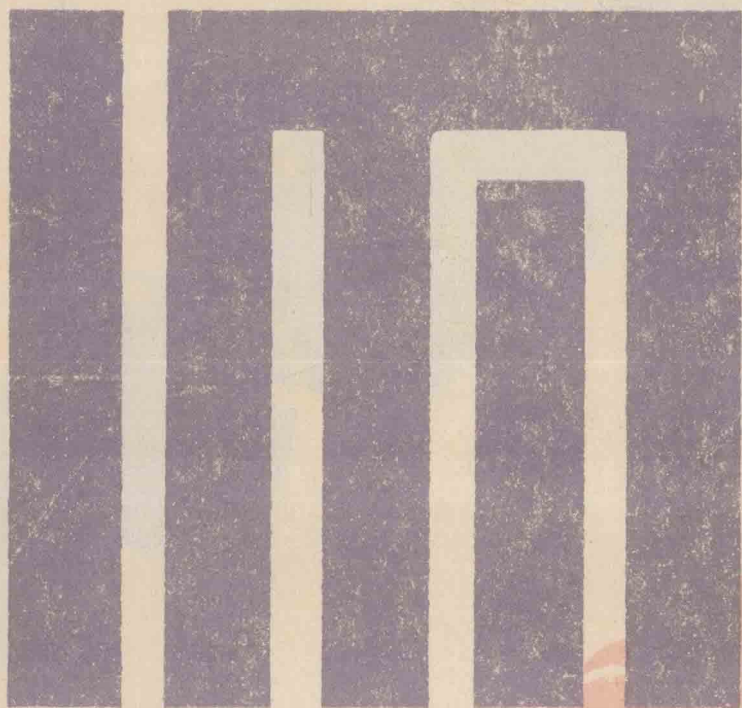




後

元

金

集

江苏工业学院图书馆
藏书章

鏡花全集 卷十九 第十九回配本（全二十九卷）

定價二千二百圓

昭和十七年二月十五日 第一刷發行
昭和五十年五月二日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
發 行 所 株式會社 岩 波 書 店

電話 (03) 351-4112

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

由縁の女（大正八年一月）……………	一
紫障子（大正八年三月）……………	五五五

由
縁
の
女

出達。故郷の山　手筈。遠目金　針屋の妻。紋の橘　雨の小唄。緋鹿子
幼き頃。祭の夜　おとつれ。階子の瀧津瀬　斑猫。黒き瓶　橋の柳。
女夫松　佛間の雨。繪草紙　草の朝露。白はぎ　白粉つけて。紅さし
て　山蟻。山男　色の白い束ね髪。半面熊　山出の駒　怪しき棕櫚
人形。古槐の霧。禁厭　鼈笛吹き。猿かなづ。山道は山巖し　さまよひ。
時雨の橋。青い雫。石榴の影　貴女。姫鮎。靈藥　古寺。蚯蚓の遊女　播
州。姫路の人。高樓　狂人。夕霞　龍宮の戸。螢。雪　粗朶折る音。密通詩
人　朝起。雀　水晶の裡の幻　天上の貴女。吉祥果　花賣。伏柴　鬼
子母神の話　猫魔　松ヶ枝。六つの袖　露　月影の霜。雪のむかし。
紫の花　霧の海の轡の音。葦間の紅　銀の矢。白衣の笄　大雨。朝晴
の雁來紅。グレーの詩　二股越　深山の謡。菊枕。戀の蓍　毬の嘲。關
手券　白菊の蓑。清水の調　蜘蛛の呪詛　巡禮。お楊より

出達。
故郷の山

一

湯歸りの細君と、火鉢の前に對向ひで、

「先刻、お前が湯へ出がけに來た手紙だがね。」

「……孰方から。」

「針屋のお光さんからだよ。」

「まあ、御故郷の然う、お珍しいぢやありませんか。」

「珍しいにも何にも、學校をむやみとなまけた女だから。」

「少々耳が痛うござんすわね。」

と鐵瓶の蓋を撫でる。

「今更悔んだつて仕方がない。」

と、茶棚を見ながら、

「番茶を一つ入替へて貰はうか。」

「薄い方が可いんでせう、又寝られないと不可ません。」

「いや、濃くても構はん、何うせ今夜は寝られまいよ。」

「何うしてさ。」

「種々の事を思ふだらうから——實はね、……右の手習をするけた所爲で、手紙不精此の上なしと言ふお光さんから、此の音信を寄越したと言ふものは、故郷にある私の親たちの慕の事なんだよ。」

「はあ、あ、一寸其のお茶の罐を取つて頂戴。……憚り様。はあ？ お墓が。」

「其がね、寺にないんだよ、向山、城と向合つた山だから向山さ。私たちの町から、麻野川と云ふ川を越すと、それから上りに成る。海、湖、城下も一目の見晴しで、随分景色の好い處だが、其處の、丘、谷、山懷、松林の中なんぞ、山寺も二三ヶ寺あつて、其處等々が墓地に成つてゐる。峰には月天子の堂があります。冷い良い水の湧く處で、其の傍の小高い處に、親たちの墓があるんだがね。」

町の人が、錦葉だ、茸狩だ。春は風揚げ、彼岸詣。花も霞も眺望が好いから、重詰もの、辨當、

吸筒瓢箪を御持參で、何處の里も變りません、女たちはおめかしで、緋縮緬、友染のお端折で、山路を織るが如くに掛け合はるんです、鄙めいて賑かで綺麗だよ。……廣場では鬼ごっこをする、目隠しを遣る、樹蔭や田樂を焼く、酒を煖める、三味線を弾く、唄ふ、拳を打つ、さあ踊る、と成ります。……處が、いづれも墓の前、塔婆の蔭と言ふのが、何も、骸骨の上を粧うて何とやらと悟りじみた景色はなく、娑婆に浮かれて迷つてる中に、自然と不沙汰勝な先祖代々の墓にも參詣をするんだつけ。

其の様子が、花時や、錦葉時に、まあ、言つて見れば、雑司ヶ谷ね、上野を抜けて天王寺、染井の墓に、莫塵、薄縁、毛氈を敷込んで、重詣を開くやうな形だつた。

處が、今度——市の有志家、……市の有志家なぞと言ふものは、何處にも居てさ、大きな聲をすることから、盜賊の用心にはならうけれど、婦人子兒には迷惑なものだがね、……其の有志家の發議だとき、山を開いて、公園にする事と成つた。

私たちは知らないが、一體其の向山は。」

と、焙じたての熱い處を湯呑で一口。

「あゝ、松の葉の薫がする。——いや、山霧の中に初茸が香ふのを思ひ出す。……些と薄ら寒く成つた。窓の戸を閉めないか。……御臺所に於ても湯ざめをなさると、お悪からう。」

「おや、つひぞない御深切、と檀子に立つて嫣然する。

「いや、親たちが話に出て居る。——嫁を粗末には出来ません。」

「厚く御禮申上げます。」

「處で、御無心があるね。」

「粗酒一獻でせう……」

「いや、栗があつた。焼いておくれ、……ずつと山家の心持です。」

と麻川禮吉が、秋もや、半ば過ぎての夜語。

二

「處で——其の山は、前に一度、矢張り市の有志の思ひ附で、開發とか稱へて、峰を開いて、家を建てる、樹を植ゑる、池を穿る、芝居を拵へる。茶屋料理屋が出来て、祭禮のやうに賑つたものだから、町で見ると、雲の上へ喜見城が湧いたと騒いでね、腰辨當で見物に出掛けないものは、家々の大屋根へ上つて、棧敷から龍宮でも眺める氣で、半日頼杖を支いた浦島さへ居たさうだよ。其も唯、一春夏——一體が雨の多い國だから、降ると成ると上つて山坂は難澁で、最う其だけでも寂れます。處へ名代の雪國だ、冬は話にも成りますまい、殷賑は三年とは續かないで、擴げ

た道は崩れるし、開いた峠は穴に成つて、最う私たちが小兒の頃には、……城趾とさへ言ふものを、芝居や料理屋などは影もない。其の時出来た見晴しの、(日暮しの丘)とか言ふ、草の蓬々と生えた中に、立腐れに残つた小屋が一つ。山開きの頃には、芝居より繁昌した(扇の茶屋)の跡だとかつて、家族は残らず退轉したのに、七十幾つの婆さんが一人、大雪の中にも山を下りずに、白髪で目を光らして、化けた狼のやうに籠つて居て、殺された、とか、死んだとか言ふ話——
 蟋蟀、ばつたを追廻したり、つくし、茅花をぬく小兒たちには、其が孤屋の黒塚のやうに聞えて、「汝は納戸を覗いたな。」——と怯かすと、わツと言つて遁げたものです。……

山の中腹に天満宮の社がある。拜殿、額堂、境内の白梅紅梅は因より、お宮の外廻りに櫻の樹が多いから、其の當時の山開は、此の邊を見當てにしたものらしい。家はなくなつても、松は枯れず、櫻は榮えて、一重の咲く頃は、枝の花の中から、紫の醫王山が見え、遙に聳えて雪の白山が眺められようと言ふ處でね。

料理茶屋の庭の築山のあとなぞは、池は埋れながら、時が来れば杜若が咲き、菖蒲が咲く、銀の振出しの箸を使つた振袖も偲ばれるし、銚子を持つて酌をした、裳を曳いたのも思はれる。忘れたやうに河骨の咲くのも面白い。萌黄の山が紋着をきたやうです。」
 禮吉は番茶を替へて、

「いや、栗を撮みく、大分道草を喰つたぞ。——其處で、以前の山開きは、山の中腹までだったが、今度のは峰まで飛上つて、一列一體に公園にしようと言ふんださうだ。

就ては、件の有志家が、市の又、當事者と云ふのに謀つて、一山の墓を餘さず取拂ふ事に成つた。——さあ、其の事で從姊（お光を言ふ。）から、此の急飛脚さ。

豫て土地の新聞に、市役所の名義で、右の趣を廣告して、——何々につき上申して、移轉料を申受くべし。何月幾日までに其の申出なきものは、市に於て適宜の共同墓地に合葬す——と言ふお觸れた。」

細君は心得ぬ顔色で、

「まあ、それだと、お墓の店だてですわね。」

「店だて處か、追拂さ。……墓は借家ぢやあないんだから。……それに有志家、當事者などと云ふ連中の、いゝ氣な事は、色白き方、髪黒き方云々で、心當りのものは、區役所へ申出づべしの行倒れや、投身の廣告と同じ所へ、七行ぐらゐるな廣告を新聞に出して——お光さんが、こゝへ切抜を送つてくれた、——日本中へ知れるものと思ふらしい。……此方が間抜けより、有志家の見識は凄じい。」

禮吉は手紙の半を、火鉢の上に繰擴げて、

「……何かのたよりにつけ、お聞きおよびで、思召しのほど御申越しもあらうかと、おなつかしくもあるし、毎々おたよりを待つて居たけれど、其のまゝに日の經つうち、最早や期限とやらに差せまり候へば……さ。……危い〜。」

と、手紙ながら一つ胸震ひをして、

「祖父さん、父も、……既の事に、若くつて亡くなつた江戸うまれの母も、口の臭い、血の濁つた、碌に湯に入らない奴等の骨と、うじや〜一所に投込みの塚に成る處だつた。」

三

禮吉は手紙を卷戻しつゝ、

「自分かまけに、二年、三年、年始狀のほか音信不通な事もあるのに……忙しい中から、お光さんが氣の付いた、此の深切は難有い。」

と一寸頂く、

「姉さんの御深切は、其は言ふまでもありませんけれど、貴方の御両親のお心が、お手紙に添つて、其の事をお知らせなすつたんでせうと思ひますよ。」

禮吉は軽く辭儀をするやうに頷いて、

「眞個、然うかも知れません。祖母さんや、父親から、後に聞いたのでも、母親は（東京へ歸れたら其の日に死んでも構はない。）と言ひくしたツて事だから、骨に成つても一日も早く來たらう、と思ひながら、遠くぢやあるし、此方で改葬をしようと成ると、手續や何かが面倒だし、……と云つて、面倒ぐらゐで其のまゝにして置いては濟まないけれど、つい何の彼の、と又ね、——其處には御存じの都合があつて、其れなりに成つて居たが……」

「ですから、店立ですか、何ですか、禍が福ぢやありませんか。それは其の景色の佳い山の峰で、松風を聞いて、靜にお心易う、やすんで在らつしやる處を、お起し申して、遙々窮屈な道中をおさせ申すのは、勿體ないやうですけれど、其は、お地頭、お代官、庄屋様の御差圖で、」

「堂々たる北陸道の太市街の、右の有志家、當事者を、庄屋様は無學過ぎる。……第一そんな酷い田舎ぢやないんだよ。」

「でも、まあさ、……長いものには巻かれろとかツて、それは仕方がないとして、御骨に我慢して頂いて、早く此地へお連れ申して、祖母さんの在らつしやる雜司ヶ谷のお墓の傍へお納めなすつて下さいな。屹と私、大切におもりをしてあげますから。」

「難有い——女中たちは未だ湯から歸るまいね。」

「出して遣つたばかりですよ。何うしてなかく、あの人達は長いんですから、何故、何か用？」

「いや、此處は一つ更つて、女房に禮を言ふ處だから。」

「あんな事を——串戯はよして、御兩親も、どんなにお喜びだか知れませんか、私も嬉しいんですよ。」

「其の通り、申聞けます。」

「そして、貴方がお迎ひに行らつしやるんでせうね。」

「先刻は、偶と、お光さんに萬事を任して頼まうと思つたけれど、親たちの骨だ、私が行つて負つて来よう。」

「え、然うなさいましとも、當前ですわ。でも、事が極ると、私何だか心配な事が出来た。」

と毗の切れた俯目に成る。

「留守かい。」

「否、それは御近所もお心易し、構ひませんけれど、私はまだお話に伺つたばかり。……雑司ヶ谷においでで祖母さんの他は、一度もお目に掛つた事ありませんから、お佛壇のお位牌に、毎朝手を合せますよりほかに、何にもお世話らしい眞似はした事はないんですもの、御骨が近くへ入らしつては、こんなものが、もしか、お氣に入らなかつたら何うしようと思ふですよ。」

「蕎麥に、柿、葡萄、酒、か。何でも親たちの生前好きだったものは、此頃ちや私よりお前の方

が知つててくれる。……御心配決して無用、先祖に對し、家に對し、と言ふのが此の借家だけれど、何一つ申分のないのはお前で、有れば私だ。……不都合があつて勘當をされれば僕だね。親たちに追出されれば私だよ。何の彼のと不斷は我儘を申上げたり、勝手な眞似も遊ばすが、親の前へ出たと成ると、私の方が一堪りもない、其は眞個、確なものです。」

細君は半ば嬉しさに、半ば揀つたさうに、一寸極りの惡さうに、

「尤も些とぐらゐる、御兩親にいひつきたい事もありますけれど」と、嬌然して、

「そんなに、おつしやつて下すつちやあ、消えてなく成りたくになりますよ。……嬉しくつて、とほろりとする。」

「消えられて堪るものか。」と、此も打背いて、背後の佛壇に面を反した。

「あのね、」

「何。」

四

「私また一つ心配な事が出来たんですがね。」

禮吉は四角に膝に手をついて、

「旅行中、酒の事？」

「些とも、……其の間は御兩親にお任せ申して置きますから、召飲りたけりや、前後正體もなく召飲れ。」

聞くものは唯苦笑した。

「そんな事ぢやないんです……然うやつて御兩親が、當地へ入らつしやるのと一所に、私の可愛い、大好きなお祖母さん——貴女の留守には、割前でお鯨を買つたり、女中がついてお寺参の歸りには袂から煎餅が出たり、蜜柑が出たり、私が嬉しがつたり、炬燵にあたつてお在なざるのを背後から密と擦つたり、（こいつめ。）と打たうとなすつたり、あはく言つて私が遁げたりした——お祖母さんは、一所に歸つて來て下さるでせうか。」

「歸る？……歸るにも行くにも、年寄はお前、東京へ來てから亡く成つたんだから雑司ヶ谷に葬つてあるんぢやあないか。……丁と當地に居るんだね——で、何かい、割前で鯨を騙つたのかい。」

「え、お好でしたわね。」

貴方のお留守事に時々ね、私も大好きですから。……お祖母さんがね、火鉢の許から、このこと立つておいでなすつて、私が縁端で、裁縫か、何か……餘り手利ぢやあないのだから——ほほ、目を据ゑて遣つて居ると、背中をトンと叩いて、（姉さん、……出しあひで鯨を買はう。）で